

## 「Happy people make」

なかむらもとあき  
中村元昭

受賞のことば  
普段は生徒向けの学級通信くらいしか文章を書くことのないのですが、今回は二月の引退から半年、自分にとってどれほど藤沢調教師の存在が大きかったかを思い知らされている中で、二つのエピソードを中心に文章にしたところ、思いのほか高い評価をして頂き、驚いています。藤沢調教師には競馬を教えてもらっただけでなく、競馬でいろいろなことを学ばせて頂きました。その思いが文章から伝われば幸いです。ありがとうございます。

プロフィール  
大の競馬好きだった父の影響でハイセイコーから競馬を覚える。競馬歴約五十年。社会人になると同時に一口馬主クラブに入会。仕事が許す限り愛馬の応援に現地へ駆けつける。これを個人的に「馬優先主義」と呼んでいる。

子どものころ、「ど根性ガエル」というアニメがあった。その中で、主人公ひろしの中学校の町田先生が毎回使うセリフがあった。「教師生活二十五年この町田：」というヤツだ。見ていて、二十五年という時間の長さはまったくピンとこなかった。それが気づいてみれば、自分の教員生活は三十年を越えてしまった。若いころはただ無我夢中で仕事をしていたような気がするが、ここ十年ばかりはある一つのことを頭において生徒と接してきた。そのことばとは、

「Happy Teacher makes happy student」。言うまでもなく、今年の二月に引退した藤沢和雄調教師の、「Happy people make happy horses」のアレンジだ。「馬優先主義」「勝より一生」。そして「Happy people make happy horses」。日本の競馬に革命を起こしたともいわれた藤沢調教師。だが、そういう「藤沢流」を知る前に藤沢厩舎を身近に感じる理由があった。それは亡くなった父のおかげだ。父の大ご臈肩は野平祐二さん。騎手時代の最愛の馬はスピードシンボリ。調教師になったからはシンボリルドルフ。父のご臈肩騎手も当然のようにルドルフの主戦である岡部幸雄騎手になっていった。

ルドルフは藤沢調教師が調教助手時代に関わった馬でもある。そして藤沢厩舎が開業すると岡部騎手が主戦になって大レースを次々に勝っていった。

シンコウラブリイ、バブルガムフェロー、タイキブリザード。藤沢・岡部コンビが勝つたびに、馬券も当たったのだろう、父はいつもご機嫌だった。

そんな父に病魔が忍び寄る。数年前に手術した癌が再発し、競馬場へ行くのがしんどくなっていった。PATなどない時代、毎週東京競馬場に行っていた父はそれでも馬券が買いたくて、日曜日になるとマークカードを手渡してきた。

あれは宝塚記念の日。もう先は長くないと悟っていたのか、競馬場に行こうとする私にこんなことを言ってきた。

「これまで一点十万っていう馬券は何度か買ってきただけ、二十万っていうのは買ったことがないから一度買ってみたい。タイキブリザードの単勝だ」

差し出された二十万円とマークカードを受け取ったものの、逡巡している私を見てさらに、  
「ただし、二十万買うからには馬を見てからにしたい。」

テレビでパドックを見て確認するから、競馬場から電話をかけてくれ」

携帯電話はまだごく一部の人が持っておらず、競馬場の公衆電話から言われた通り、発売締め切り十分前くらいに家かけると、  
「予定通り。買ってくれ」

二十万円の単勝馬券(正確には十万円の馬券二枚)を握りしめて東京競馬場のモニターでレースを見る。好スタートから二番手を進むタイキブリザードと岡部騎手。例によって首を下げ気味に走る姿はまるで重戦車だ。  
「好勝負は間違いない」

レースは向正面から第三コーナーに差し掛かる。「ブリザードが勝ったら父は助かる。負けたら…」  
そんな考えが頭をよぎる。第四コーナーで早くも先頭に立つ。直線。あと二〇〇m。が、最後に脚色が鈍る。4着。

肩を落として家に帰ると、父は思いのほかすっきりした表情で、  
「気が済んだ」  
とだけ言った。

それから二か月後、父は旅立った。

父のおかげで注目するようになった藤沢厩舎の快進撃はその後も続いた。タイキシヤトル、シンポリクリスエス、ゼンノロボロイ。そんなころに一口馬主クラブで藤沢厩舎の馬に出資した。毎週更新される調教データ。「三頭併せ併入 馬なり余力」の繰り返し。こんなので大丈夫かという不安がよぎる。一方で、これでみんな走っているじゃないか、という思いもあった。実際、出資馬も十分すぎるくらい走ってくれたし、お母さんになってからも子どもたちが藤沢厩舎に入って頑張ってくれた。父が亡くなってからは、出資馬たちが藤沢厩舎とつないでくれた。思えば三十年以上、藤沢厩舎の馬ばかり見てきたような気がする。

もちろん、こちらは一介の一口馬主クラブの会員。藤沢調教師との接点があるはずがない。幸運にも出資馬が勝利して口取りのためにウイナーズサークルへ行くことができて藤沢調教師はほとんど写真には写らない。

そんな中で、一度だけ、ありえないことが起こった。あれは函館開催の最終日最終レース。出資馬は三年近く勝利がなく、馬券に絡んだのも3着が一回だけと苦戦が続いていた。それでも藤沢厩舎では試行錯誤を繰り返しながら懸命に立て直しを図ってくれていた。この日は初の一二〇〇m戦。マイル以上の距離しか使ったことがなく、二四〇〇mでの勝ち星があるこの馬にとっては無謀な挑戦にも見えた。が、レースでは中団につけると第四コーナーから外を回って追い上げ、直線では一気の差し切りを決めた。まさか勝つとは思っていなかったので呆然自失。しばらくボーっとしていたが、ふと我に返った。

「口取りの集合場所に行かなきゃ」

あわてて走って行くと、クラブの職員の方が待っていてくださるが、ほかには誰もいない

「今日は会員さん、お一人ですよ」

ウイナーズサークルへ行くと、満面の笑みを浮かべた藤沢調教師が我々の姿を見て、

「あれっ、この馬、一口しか売れなかったんだ」

とのきついジョークを放つ。これには一緒にいた生産牧場の社長も苦笑いしかなかったが、ジョーク(?)はこれにとどまらない。口取りの撮影が終わってJRAの係員が表彰式の用意を始めていると、こちらに向かって、「私の代わりに調教師の台が上がってトロフィーもらってきてよ」

「????」

いやいや、それはいくらなんでもまずいでしょうと思いつつ、何と答えていいか困っていると、藤沢調教師は、

「ねえ、社長、いいよね。」

と社長の承諾を取りつける。社長はまたもや苦笑いしながら曖昧にうなずくしかない。クラブ職員の方も、「社長もいっておっしゃっているのです、どうぞ」

もうこうなったら仕方がない。腹をくくって台の上のつってトロフィーを受け取る。ウイナーズサークルの外でカメラを構えているファンの姿が目に入る。本当は藤沢調教師の写真を撮りたかったらうに、ごめんなさい、と心の中で謝った。

表彰式が終わると藤沢調教師は何事もなかったように、「調子がよかったら中一週で札幌使おうよ」

と笑顔で言い残して検量室のほうへ歩いて行った。

こんな「事件」があつてから、ますます藤沢厩舎に

対する思い入れが深まった。ソウルスターリング、レイデオロ、そしてグランアレグリア。定年が近づいていることは知っていたが実感がなかった。今年の二月の東京開催は毎週、競馬場へ行つた。藤沢厩舎の馬が出るレースはバドックへ、レースが終わるとホースプレビューへ。藤沢調教師は勝つても負けても笑顔で馬を出迎え、首筋をポンと叩いて労をねぎらっていた。ずっと見てきた光景が、もうすぐ、終わる。

二月二十七日。中山競馬場。藤沢厩舎最後の出走の日。第七レースをレッドモンレーヴで勝つとコロナ禍で中止されていた口取りが、ウイナーズサークルではなく検量室前で行われた。ファンの大きな拍手に手を挙げて応える藤沢調教師。本当に、藤沢厩舎が幕を閉じた。

藤沢厩舎はなくなったがこちらの教員生活はもうしばらく続く。「Happy teacher make happy student」を私も定年まで続けられたら幸せだと思っている。でも、最近、ふと思う。私が幸せなのは、「Happy student make happy teacher」だからではないのか。生徒のおかげで幸せな自分がある。こんなふうを考えられるようになったのも藤沢調教師のおかげ。父子二代にわたってずいぶん幸せな思いをさせてもらってきた。「happy people」は「happy horses」だけでなく「happy people」をもつくってきたし、これからもつくっていくのだろう。